

カンボジアの人口ピラミッド

総務省統計研修所研究官室

西 文 彦

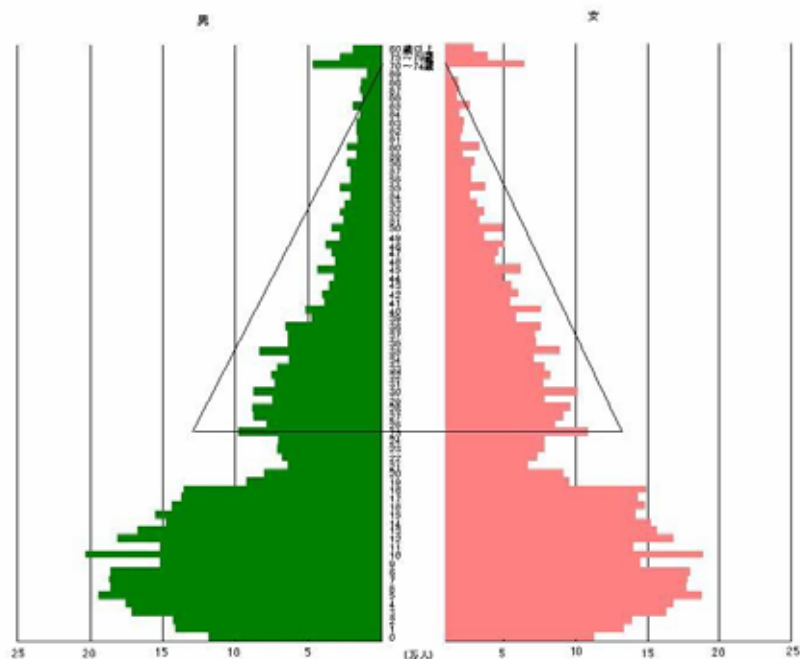
以下に述べることは、筆者の個人的な見解であり、総務省統計研修所の見解ではないことを、予めご了解願いたい。

1. カンボジア国民に「心の傷」を残した歴史

カンボジアでは、1970 年、政府の経済政策の失敗により、財政が困窮する中、ロン・ノル将軍がクーデターを起こし、国家元首であるシアヌーク元国王を解任した。これを契機に、隣国のベトナム戦争がカンボジア領内にまで拡大し、以降、1991 年にパリ会議が開催されるまでの約 22 年間の長きにわたって、カンボジアは戦乱に巻き込まれた。

この 22 年間の中でも、1975 年から 1979 年にかけての 3 年 8 か月の間のポル・ポト政権（クメール・ルージュ政権ともいう。）下では、急進的な共産主義に基づき、都市の無人化・農村への強制移住、集団生活化、市場・通貨の廃止、宗教活動の禁止、学校教育（労働、農業及び政治を除く）の禁止等が断行され、カンボジアの伝統的な社会制度は破壊された。これらの政策に反対する者もしくは反対者とみなされた者は、次々に捕らえられ、残虐な拷問を受けた後、処刑されていった。これが世にいう「カンボジア大虐殺」である。犠牲者は 200 万人ともいわれており、この大虐殺は、「心の傷」として、現在でもカンボジア国民の記憶に深く刻み込まれている。

図 1 カンボジアの人口ピラミッド（1998 年）



2. カンボジアの人口ピラミッドに残る大虐殺の傷跡

1998年、カンボジアでは36年ぶりに人口センサスが実施された。図1は、その結果に基づく人口ピラミッドである。

(1) ポル・ポト政権下の急激な出生率の低下

図1をみると、19歳から24歳にかけての大きなクボミが、すぐに目につく。1998年に19歳から24歳といえ、1974年から1979年にかけて生まれた人たちである。1974年から1979年といえ、前述のポル・ポト政権下の時期(1975年から1979年)と、ほぼ一致する。したがって、大虐殺のほか、都市の無人化・農村への強制移住、集団生活化などの政策実施が、当時の出生率を大きく低下させていたことが推測できる。

(2) ポル・ポト政権以前に生まれた人口の少なさ

次に、25歳以上の人口、すなわち、ポル・ポト政権下で、すでに生まれていた人たちをみると、19歳以下の人口と比べて明らかにピラミッドが細くなっていることがわかる。すなわち、人口が少ないということである。

図2は、ベトナムの1999年における人口ピラミッドであり、図3は、インドネシアの2000年における人口ピラミッドである。これらと比較しても、カンボジアの25歳以上の人口のピラミッドが明らかに細いことがわかる。

ここで、単純な方法により、25~69歳人口が、想定される標準的な人口よりも、どのくらい少ないかを大まかに推計してみた。図1における三角形(男女ともに同様)は、19歳以下の人口ピラミッドから推計した標準的と想定される25~69歳の人口ピラミッド¹⁾である。下の式のとおり、その三角形の面積、すなわち、想定される標準的な25~69歳人口から実際の同年齢層の人口を差し引くことにより、どのくらい人口が少ないか、すなわち、1998年現在で、同年齢層が「カンボジア大虐殺」の影響を受けている可能性のある人口を推計することができる。

【式】

$$\begin{aligned} & \text{想定される標準的な人口(25~69歳)} - \text{実際の人口(同)} \\ & = \text{カンボジア大虐殺の影響を受けている可能性のある人口(同)} \end{aligned}$$

上の式に、実際の数値を当てはめると、以下のとおりである。

【男性】

$$3,070,171 - 1,897,027 = 1,173,144 \text{ 人}$$

【女性】

$$2,936,098 - 2,324,376 = 611,722 \text{ 人}$$

したがって、カンボジア大虐殺の影響を受けている可能性のある人口を大まかに推計すると、男性が117万人、女性が61万人で、総数178万人となり、世間一般にいわれている「カンボジア大虐殺」の犠牲者の概数である200万人に近い数字となる。

また、このことは、「カンボジア大虐殺」の犠牲者が、単に戦闘要員としての成人男性のみならず、女性や子どもにまで及んでいることを示している。

- 1) 図1の上に、一辺をX軸(人口)、一辺をY軸(年齢)、頂点をY軸上の70歳の点とする直角三角形を描く。斜辺は、頂点と7歳の人口(横棒グラフ)の先端を通過する線である(男女ともに同様)。図1上の三角形は、この三角形の25歳以上の部分に相当する。

なお、70歳を頂点とする理由は、ここでは、70歳以上の人口を除外して推計するためである。これは、70歳以上の人口が総数の2%程度と少ない上に、これを含めると、推計上の誤差が大きくなってしまうためである。

また、頂点と7歳の人口(横棒グラフ)の先端を通過する線を斜辺とする理由は、19歳以下の各歳別人口のうち、Age Heaping (エイジ・ヒッピング)²⁾の5歳、10歳を除いては、7歳の人口が最も多いので、斜辺の推計には最も適しているためである。

- 2) Age Heaping とは、図3のインドネシアに見られるように、人口ピラミッドなどの年齢各歳別の統計において、例えば50歳、55歳など、0または5で終わる年齢において、人口が突出して多くなる現象のことである。この現象が起こる原因は、その国または地域において、自分の年齢を正確に知らない人が多いことである。このため、自分の年齢を回答する場合には、50歳、55歳などと、自分の年齢に近いと思われる、切りの良い数字で回答することになるわけである。(詳細は本誌2004年2月号参照)

この現象は、発展途上国に多く見られる。しかし、発展途上国であっても、十二支が社会的習慣として浸透している国、例えば、図2のベトナムなどでは、この現象は僅かに見られるのみである。一方、カンボジアでは、インドネシアほどではないが、図1のとおり、若干のAge Heaping が出ている。

(3) 25歳以上人口における男性の少なさ

上記(2)からもわかるように、25~69歳人口では、男性が1,897,027人、女性が2,324,376人で、性比(男性人口/女性人口×100)が81.6(通常は100前後)と著しく低くなっている。ちなみに、19歳以下の人口の性比は103.0と通常の水準であることから、25~69歳人口の性比が、いかに異常であるかがわかる。

上記(2)の推計では、「カンボジア大虐殺」の影響を受けた可能性のある人口は、男性が117万人、女性が61万人で、男性の方が約2倍となっており、より大きな影響を受けたことが推測できる。

図2 ベトナムの人口ピラミッド(1999年)

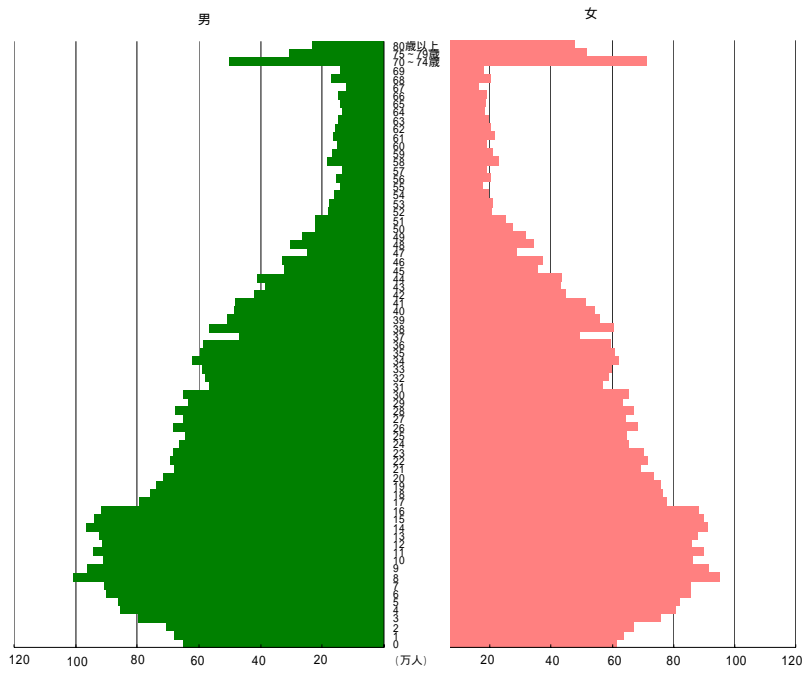


図3 インドネシアの人口ピラミッド(2000年)

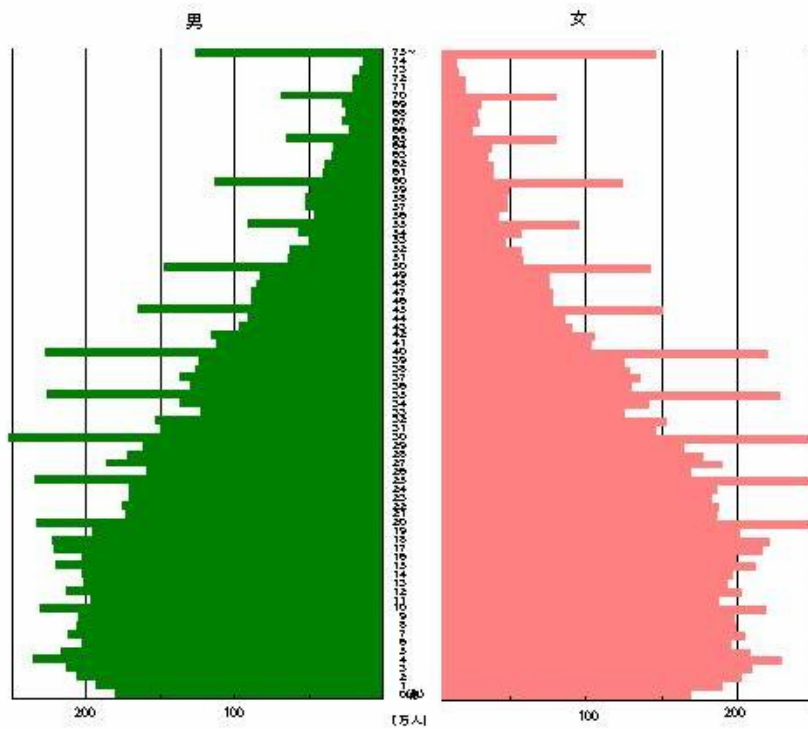
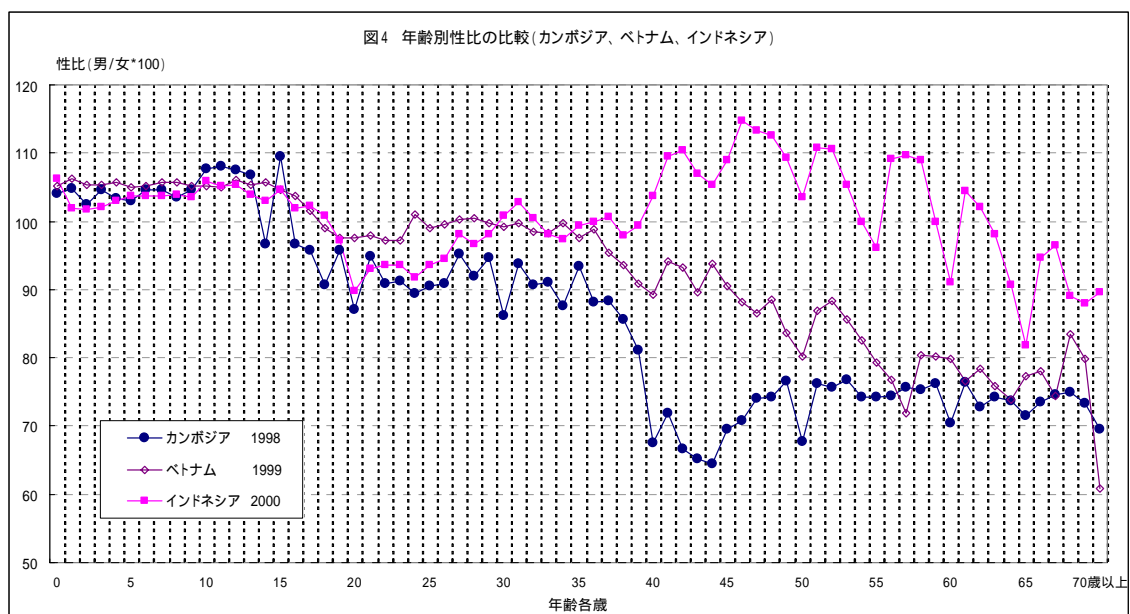


図4をみると、カンボジアの25～69歳人口では、性比が各年齢において100を大きく下回っており、老若を問わず、男性の犠牲者の方が多かったことを示している。これは、戦闘には主に男性が対処することになるので、当然のことであろう。特に、40～48歳人口の性比は70前後と最も低くなっているが、この年齢層は、ポル・ポト政権時代は、17歳から29歳であり、戦闘要員として最も適した年齢であったため、犠牲者が多くなったのであろう。また、もう1つの理由として、ポル・ポト政権下の弾圧の主な対象が知識人であったことが挙げられる。男性は、第2次及び第3次産業における就業率が女性よりも高いので、知識人とみなされがちであり、犠牲者が多くなったものと考えられる。

図4には、カンボジアのほかに、ベトナムとインドネシアの性比が示されているが、これらの国と比較しても、25～69歳人口では、カンボジアの性比がかなり低いことがわかる。また、熾烈なベトナム戦争(1960～1975年)を経たベトナムの24歳以上人口と比較しても、カンボジアの性比の方がかなり低い。さらに、ベトナム戦争開戦時に16歳以上であった55歳以上人口と比較しても、全体的にはカンボジアの性比の方が少し低い。このことから、「カンボジア大虐殺」の性比への影響は、ベトナム戦争以上のものであったことが推測できる。



3. おわりに

カンボジア政府は、2008年に次回人口センサスの実施を予定している。上述のとおり、人口センサスは極めて重要な統計を提供すること、また、国連勧告の下、全世界的に実施されている調査でもあることから、我が国政府は、カンボジア2008年人口センサス支援を主な目的として、カンボジア計画省統計局(National Institute of Statistics Cambodia、NIS)に対して、総務省統計局が中心となってJICA(国際協力機構)を通じた大規模な技術協力プロジェクト(カンボジア政府統計能力向上計画)を2005年8月から2～5年間の予定で実施している。(<http://www.stat.go.jp/info/meetings/cambodia/nittei.htm> 参照)